

東洋大学学術情報リポジトリ Toyo University Repository for Academic Resources

『涅槃経』と中国唐代仏性論：法宝・澄観・湛然の仏性説を中心として（第1回学術大会テーマ 東アジアにおける仏性・如来蔵思想の受容と変容）

著者	張 文良
雑誌名	東アジア仏教学術論集 = Proceedings of the International Conference on East Asian Buddhism : 韓・中・日国際仏教学術大会論文集
号	1
ページ	235-251
発行年	2013-03
URL	http://doi.org/10.34428/00007383

張文良氏の発表論文に対するコメント

張珍寧* (韓国 円光大学校)

この度の張文良先生の論文は、仏性と法性、心（心性）の関係に関する問題意識の延長線上に書かれたものであり、この分野における長期にわたる研究の成果と言えるものです。この分野の知識が乏しい私が、あえて本論文のコメントを引き受けることにしたのは、個人的には得られないであろう貴重な勉強の機会となるからで、このことをありがたく思っています。まず私の理解にしたがって論文の内容を要約し、次に、いくつか気になる点をお尋ねする方法でコメントを進めていこうと思います。

本論文は、中国唐代に、一時は玄奘の門下でもあった涅槃師である法宝（7世紀初—8世紀初）、華嚴宗の第四祖と呼ばれる澄観（738—839）、唐代天台宗を復興させた湛然（711—782）の仏性説をめぐる論争を中心とし、第一章は「第一義空と仏性」、第二章は「仏性と法性」、第三章は「仏性と心」をそれぞれテーマとしています。

第一章は、『涅槃經』の「仏性者、名第一義空。第一義空、名為智慧」（T12, p.523b）における「第一義空」の意味をめぐる法宝の見解と、それに対する澄観の批判という形で進められています。その内容は以下のように要約することができます。

（1）「空」と「如来蔵」との関係の解明に対する論争

「空」を『勝鬘經』で明示した「空如来蔵」と「不空如来蔵」の中のどちらと見るべきかに関する論争です。まず法宝は、第一義空を空から区別し、「第一義空=不空如来蔵=仏性」と見る立場であり、これに対して澄観は、空と第一義空とを同一視し、第一義空=空如来蔵、智慧=不空如来蔵とするが、再び空と智とが相成するという立場から、空如来蔵と不空如来蔵とを同一線上の二つの側面（相と性）と見、この二つを包括するものを仏性としていると理解されます。

*장진영 (ジャン・ジニョン)。円光大学校こころ人文学研究所 HK 研究教授。

(2) 「空」が「相空であるか、性空であるか」に関する論争

まず法宝は、三性に対する理解でも、空を「相空（煩惱の虚妄性）＝無」と見て、遍計所執性と依他起性に配し、不空を性空（如来蔵の性功德）と見て、円成実性（真如）に配しています。これに対して澄観は、空如来蔵を性空と見、基本的に依他起性の無性を中心として解釈しています。すなわち、依他起性は無性であるため遍計所執性はなく、依他起性は空（無性）であるが、その「無性の理」が円成実性となると見て説明を行っているものと理解されます。つまり、法宝は空を煩惱の虚妄性（煩惱の相空）とし、澄観は空を煩惱の真実な本性（煩惱の性空）とするという違いがあります。

(3) 「空者」と「智者」の関係における「見」の意味とその主体の問題

『涅槃經』の「所言空者、不見空與不空。智者、見空及與不空。常與無常苦之與樂我與無我。… 見一切空不見不空、不名中道。乃至見一切無我。不見我者、不名中道。中道者、名為仏性」(T12, p.523b)において、「智者」は空と不空をすべて「見」た者を言います。この時、法宝は性得と修得とをすべて肯定するが、性得は「智慧覚性」（覚悟の潜在的可能性）であり、仏性の智慧が修得を通して得られるという「修得仏性」の立場を強調しています。反面、澄観は「見」を「性見」と見、「衆生が本来具えている智慧の本性」と見えています。

第二章は仏性と法性の関係です。これは『涅槃經』の「非仏性者。所謂一切牆壁瓦石無情之物。離如是等無情之物。是名仏性」(T12, p.581a)に対する見解の違いです。その核心は、「第一義空」と「智慧性」の関係、すなわち空性の普遍性と智慧の特殊性とをどのように理解するかにかかり、これについて多様な仏性説が紹介されています。

(1) 法宝は、仏性を理仏性と事仏性と理解し、理仏性は一切の有情と無情に普遍的に遍在したものと見、事仏性は修得の仏性であると見ました。これに対して華嚴宗の法蔵(643-712)は、仏性と法性とを概念上で区別しながらも、法性は有情と非情に遍在していることを強調し、非情仏性、非情成仏をすべて認定しています。澄観は、法宝を初めとする伝統の仏性説の見解と華嚴宗の見解の間の相違を、性と相との立場で調和させているものと見られます。ここで澄観は、修行と成仏の立場では非情仏性と非情成仏を否定しているが、この点では法蔵と違いがあります。すなわち華嚴宗の法蔵の見解を一面〔性の側面では〕継承しているといえますが、〔相の側面から見る時は〕むしろ法宝の見解と通ずる部分がより大きいと考えられます。

(2) 一方、天台宗の湛然は『金剛錍』において、『涅槃經』での非情無性の教えは権教の説法であると見、仏性は一切の有情と無情とに遍在するという立場から出発し、澄観が主張した仏性と法性とは異なるという立場〔仏性法性各別説〕を批判しているのです。

第三章は仏性と心との関係です。ここでは『涅槃經』の「凡有心者定當得成阿耨多羅三藐三菩提。以是義故。我常宣說一切衆生悉有仏性」(T12, 524c)における「心」の理解が仏性説の違いに繋がっています。

澄観は、仏性を心(心性)の立場で理解するが、この時も「心」を性と相とに分けて、その関係を説明しています。すなわち「性」の立場では、心と境とがどのような断絶もないために、非情にも遍在しているとするのであり、「相」の立場では、心と境とで全く異なるため、心が非情には遍在していないと見、仏性と法性とを区別しているのです。これに対して湛然は、この時の心を華嚴の性起説で主張する「清浄なる真心」ではなく、「煩惱心」さえも包括した心と見る、性具説の立場を立てているのです。

これまで張文良先生の論文に対して、私なりの要約をしてみました。広範かつ専門的な内容であるため、筆者の拙い見識では正しく理解できていない部分が多いと思いますが、以上の大まかな理解に立つて、何点か気になる点をお尋ねいたしたいと思います。

1. 法性宗に対する教判的な位置に関することです。澄観は教判上、大乘の教判として、法相宗、無相宗、法性宗などを挙げながら、その中の法性宗において大乘終教と円教とを一緒に説明しています。この時、法性宗のうちに終教と円教とをともに見ようとする理由は何であるか、あるいはそれにより生ずる混乱はないのか、そしてそれをどのように調和させているのか、疑問に思います。例えば、法蔵は『探玄記』(T35, p.405-406)で、仏性を有情にだけ限り、草木などには仏性がないという立場を三乗教(終教)と見て批判しており、円教の立場では依報と正報にすべて通ずるため、「非情仏性・非情成仏を認定」するものと理解されます。これに反して澄観は、仏性を性と相とに区別して、性の立場では仏性と法性とは同一であるが、相の立場では仏性と法性とは区別されると述べ、「非情仏性・非情成仏を否定」しているものと理解され

ます。また、このような澄観の立場は、華嚴宗特有の成仏説（一念成仏、旧来成仏、本来成仏など）とは、どのように調和させることができるのか、お伺いしたいと思います。

2. 湛然の非情成仏説と澄観の非情無性説との違いは、天台の性具説と華嚴の性起説との思想的な違いに起因したものと理解されます。性起説では、本来性が清浄なる真心そのままに起きるという点から見一方、性具説では、衆生の煩惱心をそのまま肯定するという点で違いがあります。澄観が同時代の天台と禅思想の影響を受けたものと評価されますが、もし澄観の性起説に華嚴宗の伝統説と異なる点があるのであれば、その主な理由は何であるか、お伺いしたいと思います。

3. 最後に、中国仏教教学の最上位に位置する天台宗と華嚴宗とをそれぞれ継承した湛然と澄観の思想的な相違を、中国の伝統思想との関係から見ようという問題意識を示しておられます。特に湛然の非情仏性説は気一元的な土台に立つ道家や禅宗（牛頭宗）の影響を受けたもの、澄観の仏性法性各別説は実用理性の影響を受けたものと見ていますが、これについて補足的な説明をお願いしたいと思います。

最後に、論文を読んでコメントをする貴重な機会を与えていただいたことに対して、再び深く感謝を申しあげること、拙いコメントを終えようと思います。

（翻訳担当：佐藤厚）